

トレーラーハウスからの便り

本 間 照 雄(南三陸町福祉アドバイザー)

(平成 20 年大学院博士課程後期 3 年の課程修了)

公務員生活を終えようとしていた矢先の平成 23 年 3 月 11 日午後 2 時 46 分、宮城県沖を震源とする M9.0 の大地震が発生した。現役最後の日まで職場に泊まり込み震災対応で過ごした。時間が経つにつれ沿岸部に甚大な被害が生じていることを知り、多くの公務員が波にさらわれ行政機能が著しく低下しているとの報道には、じっとしていることが出来なかった。沿岸部市町に経歴を書き込んだ手紙を書いて支援を申し出た。すぐに返事をよこしたのが今いる南三陸町だ。

退職辞令を受けた翌日、単身赴任で借りていたアパートの片付けもしないまま、寝袋と 1 ヶ月分の食料を車に積んで南三陸町に入った。町では、町外集団避難という宮城県では例のない避難対策の最中だった。

認知症が疑われる、介護の継続が必須、避難先で要通院等々、飛び交う会話が気になる。気づいたときには、避難先市町にある社会資源や保健福祉関係課と連絡を取り合っていた。以降、5 月中旬までは、一次から三次までの集団避難要援護者リストの作成と避難先市町保健福祉担当課との連絡調整役を担った。

集団避難に一定のめどがたった頃、集団避難した人達が置き去りにされていることに気がついた。さぞかし疎外感にさいなまれていることだろうと、町外二次避難所周りを申し出た。6 月 1 日から県内 4 市町、県外 2 県 2 市に散らばる 50 カ所 1,470 人が住む二次避難所を訪問した。

「町長に協力して町を離れたのに、町から誰も来ない」「情報が全くなく孤立している」「支援物資が届かない」等々、堰を切ったように苦情が襲いかかる。めげずに、町長のメッセージ、地元に残っている町民の声、町の復旧の様子をビデオで伝えた。帰郷の想いを持ち続けられるようにしたいと思ったからだ。

町内外に建設される 2,000 戸を超える仮設住宅での生活が気になった。孤独死、自殺、アルコール依存等々、阪神淡路大震災の教訓があるからだ。100 名を超える人員を要する被災者生活支援センター設置を提案した。現在では 130 名を超える職員が 60 カ所の仮設住宅団地を巡回し、生活相談やコミュニティづくりの支援をしている。

こんなことをしている私は、プレハブの仮設庁舎、テントを経て現在は給排水や電気のない部屋の中でもペットボトルの水がシャリシャリとなるトレーラーハウスを生活の場にし、日本の名水で歯を磨きカップ麺を主食にしている。南三陸町に来てから6ヶ月になり、社会学研究室の机が主の不在を嘆いている。先ほど「今年度いっぱい支援をお願いしたい」と言われた。この生活はもう少し続きそうだ。

